

【第六七回大会を迎えるにあたって】

「境」と「間」の地方史―信越国境の歴史像

常任委員 会
第六七回(妙高) 大会実行委員会

地方史研究協議会は、第六七回大会を二〇一六年一〇月一五日(土)から一七日(月)までの三日間、新潟県妙高市で開催する。本会常任委員会および地元の研究者を中心に組織された大会実行委員会は、大会の共通論題を「境」と「間」の地方史―信越国境の歴史像―と決定した。

本大会は、新潟県の上越地域と長野県の北信地域を主な対象地域とする(以下、信越と記す)。国境をはさむ信越は、歴史的には越後国(新潟県)と信濃国(長野県)、さらに北陸道と東山道に分断されつつも、強く影響を与えあい、関係性を持ち続けてきている。そこで、本大会ではこの地域の歴史像を「境」と「間」の視点から描き出すことを試みたい。

ここでいう「間」は、地域社会を構成する多くの要素が、互いに密接な関係を持ちながら時代を超えて形成されてきた空間をいう。個々の要素ごとに範囲は様々であり、一定しない特性が「間」にはある。例えば、信越五岳のうち妙高山の信仰は越後全域と北信地域まで及び、戸隠山の信仰は信濃に続いて越後に講が多く分布する。「間」は信仰圏や、文化圏・生活圈、あるいは経済圏などが関連し総体化した地域的なまとまりといえるだろう。

また「境」は、空間を二分する機能を持つ国境のことであり、古来より自然地形などを活かして引かれてきた。古代には国境を定める役割をもち、近世には明確な国境線となり、それは近代の県境へと引き継がれた。「境」が引かれて二つに分断されたかみえる「間」は、「境」を内包し続ける一方で、固定化してみえる「境」も「間」の影響を受けて変化することがあった。この地域は「境」と「間」の視点からみると、次のような歴史的事実注目できよう。

信越は、列島規模では東西の政治・文化の中継地で、かつ南北の結節点である。そのため、北陸を介して近畿地方の文化と中部高地を介して東海地方の文化が信越へ流入し、両者が競合・融合する様相を示してきた。弥生時代中期以降の北陸系土器と信州系土器、古墳時代初頭の前方後円墳と前方後方墳など、出自の異なる様々な要素が混在し、その分布の範囲は時

代ごとに多様に展開した。

古代になると、国郡制の施行にともない信越の国境が定まり、八世紀の中頃には越後国府が上越地域に、信濃国府が東信地域に成立したとされる。北方経営の要地として上越地域への律令国家の関与が強まるなか、北信地域との関係には変化が生じた。一方で両地域をつなぐ陸路が東山道の支道として整備されたとみられ、その中間に位置する善光寺は信仰を求心力にして信越を結んだ。

鎌倉時代、上越地域の御家人の中には、北信地域との関わりの深い武士たちが多く存在し、信越国境をまたぎ活躍する武士の姿が見られる。戦国時代、越後春日山城を拠点にした上杉氏は、北信地域を舞台に甲斐武田氏と川中島で戦った。上杉謙信は国境を越えて飯山に城を構え、北信地域への足がかりとし、ついで景勝は武田氏の滅亡を契機に北信地域を分国に組み込んでいった。

江戸時代、松平忠輝の入封から松平光長の改易まで、高田藩領は越後と北信地域を含んでいた。その後、北信地域は高田藩領から離れたが、高田藩はこの地域の女性に対しても、関川関所の通行手形を発行し続けた。この時代、用水や山林資源をめぐる争論に幕府・各藩が介入する中で、線としての国境が確立する。他方で国境をまたぐ人の動きも活発となり、日本海経由の塩をはじめ多様な物資が、北国街道・千国街道・飯山街道を行き交うだけでなく、数多くの脇道をも通って峠を越えた。こうした信濃への商品流通は、上越地域の拠点都市高田や糸魚川の間屋が掌握した。

戊辰戦争では越後も戦場となり、信越にも緊張が生じた。その後、明治・大正期にかけて、主に長野県側の働きかけで文化圏・経済圏が重なる上越地域との合併運動が起こった。また、明治二十六年(一八九三)に全通した信越線は信越と東京との距離感を大きく縮め、昭和初期には県境をこえた観光地開発が進んでいった。これは現在展開する信越観光圏につながる。両県にまたがる妙高戸隠連山国立公園が誕生した。

このような「境」を越えた信越の人々の活動は、「境」を明確にしよとする政治的な動きにどのような影響を与え、それによって「間」がどのように展開していったのか。信越の歴史を「間」という視点で再構成することは、「境」の存在を浮かび上げさせることにもつながっていくだろう。本大会では国境・県境を内包する地域の個性を「境」と「間」の視点から検討し、新たな歴史像を描いてみたい。活発な議論を期待したい。